

琉球大学学術リポジトリ

体育授業における障害者スポーツの教材価値に関する検討

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2021-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江藤, 真生子, 三田, 沙織, Eto, Makiko, Mita, Saori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48008

体育授業における障害者スポーツの教材価値に関する検討

江藤 真生子・三田 沙織

要約

本研究では、障害者スポーツの教材価値について2つの調査の結果をもとに検討した。調査1では、体育授業における障害者スポーツの実施について、特別支援学校および学級における授業、混合授業、オリ・パラ授業の3つの状況に分け、各状況の実践報告を検討した。各状況の体育授業においては、障害者スポーツを目的や手段として、情意、認知、技能、社会的行動（高橋，1991）の各領域に対応する学習を行っていたことがわかった。調査2では、中学生を対象にゴールボールを教材とした授業を実践し、その効果を検証した。生徒にとってゴールボールを行ったことは楽しい経験となっており、作戦を考えたりして進んで取り組めた授業であった。一方で、ゲーム中心となり練習機会が少ないため、技能の習熟とはならなかった。また、生徒の振り返りには【共生】や【生活に活用】がみられた。

以上より、体育授業において障害者スポーツを行うことは、共生の視点のもと多様な特性を持つ児童生徒がかかわり、運動の楽しさや魅力を味わう学習となることが示唆された。さらに、障害者スポーツには、ほかのスポーツと同様に人生、社会、世界、未来とかがかわる価値や障害者スポーツ独自の【共生】や【生活に活用】といった価値が内在することが示唆された。

1. はじめに

共生社会の実現や心のバリアフリーを目指す中において、スポーツの価値の重要性や果たす役割は大きい（文部科学省，2017b）。スポーツ基本法（2011）によると、スポーツは国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものである。また、スポーツ基本法に基づく第2期スポーツ基本計画（文部科学省，2017b）において、スポーツの価値は人生、社会、世界、未来のそれぞれと関連することで説明されている。スポーツの価値は、スポーツをする・みる・ささえることですべての人々がスポーツと関わり、スポーツの力により人生を豊かにすることができることや、スポーツで社会の課題解決に貢献し、共生社会などの実現、経済・地域の活性化に貢献すること、スポーツを通じた国際交流により多様性を尊重する世界や持続可能で逆境に強い世界の実現などに貢献すること、する・みる・ささえることをスポーツ参画人口とし、スポーツ参画人口を拡大し豊かな未来を創ることである。これらの価値は、共生社会の実現や心のバリアフリーを目指すうえで重要である。

このようなスポーツを素材とする教材を扱う体育授業は学校教育において重要な役割を果たすことになる。2017年に告示された中学校学習指導要領解説保健体育編においては、運動やスポーツの価値の1つに共生が位置づけられ、「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する観点から、体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるように指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること。」が提示された。これには、2016年の障害者差別解消法施行や、「特別な配慮を要する児童生徒について、これまで安全上の配慮から、当該児童生徒の能力等に応じた適切な学習機会を十分に提供できていない状況や他の児童生徒との円滑な関係を構築するための指導が十分にされていない状況及び指導場面において、安易な学習内容の変更や学習活動の代替になっているのではないか」とこれまでの指導上の課題を挙げている（文部科学省，2016a）ことも背景にあると考えられる。また、東京オリンピック・パラリンピック開催を控え、オリンピック・パラリンピック（以下、「オリ・パラ」と示す）教育の推進が提唱され、オリ・パラの意義や価値等の

内容について改善を図ることが示されている（文部科学省，2017a）。これらを踏まえると，多様ななかかわりの中で，共生やスポーツの価値を学ぶことが体育授業に求められていると考えられる。

他方，近年，東京オリ・パラ関連の報道も増え人々の関心も高まる中，障害者スポーツが注目されている。アダプテッド・スポーツと称される障害者スポーツの定義やとらえ方は変化してきた（佐藤，2018；渡，2011）。英語圏において障害者の体育・スポーツは「adapted physical activity, APA」と称されていた。我が国では，矢部（2004）がAPAの意識を試み，「アダプテッドスポーツ adapted sport, AdS」と造語を提唱した。障害のある人がスポーツを楽しむためには，その人自身とその人を取り巻く環境をインクルージョンしたシステムづくりこそが大切であるという考え方に基づいたものである。障害や対象の定義も多様にわたる中において，藤田（2006）は，障害者スポーツを「障がい者のための特別なスポーツではなく，参加を保障し，けがや障がいの悪化を生じさせないように競技規則や用具，運動の仕方（技術）を変更したり，新たにつくるなどした，障がいのある人も参加可能なスポーツ」（原文ママ）としている。藤田（2006）の障害のある人となない人がともに参加できるスポーツであるというスタンスは，体育授業における共生の視点に近い観点ととらえられる。

障害者スポーツの価値については，障害者スポーツの概念や文化的特性として説明されている。清野・越川（2019）は，障害者スポーツの中核となる概念として，障害児教育・社会福祉分野と体育・スポーツ分野の2つに大別し，後者をさらに，インクルーシブの視点，適合・適応の視点，配慮の視点に整理した。清野・越川によると，障害児教育・社会福祉分野とは，障害者が行うスポーツであり，気晴らしとしての楽しみ志向的，娯楽志向的な方向付けの必要性を指摘することと並んで，リハビリテーション，健康増進や社会化といったスポーツの手段的価値を大切とする考えである。つまり，障害児教育・社会福祉分野は，障害者が主体となる障害者にとってのスポーツといえる（清野・越川，2019）。体育・スポーツ分野のインクルーシブの視点とは，インクルーシブなシステムづくりや理念を背景に捉えたアダプテッド・スポーツとして理解されている考えである。清野・越川（2019）によると，障害の有無にかかわらず誰でも参加できるスポーツととらえるアダプテッド・スポーツは，障害者のためのスポーツではなく，何らかの障害のある人も行うことのできるユニバーサルなスポーツの形態を指すものである。また，適合・適応の視点とは，障害のある人だけではなく，高齢者や妊婦等，健常者と同じルールや用具の下にスポーツを行うことが困難な人々を対象に，それらに適合・適応させ行うスポーツとする考えである。清野・越川（2019）によると，この考えには，誰にでも適合・適応可能なスポーツとなるため，健常者と一緒に行うこともできるという意味で，インクルーシブやノーマライゼーションの思想に通じる考え方が根底にある。さらに，配慮の視点とは，障害者自身の視点からスポーツという社会的現象への平等参加を保障するためのものであるという立場から，「配慮の平等」を達成するための理念であり，かつ，1つの運動なのだ捉える考えである（渡，2011）。

また，藤田（2016）は，障害者スポーツの文化的特性について，「基本的にほかのスポーツと同様であるが，身体的な機能や知的発達段階が同じであることを出発点とするスポーツにはみられない特徴がある」ことを主張している。その特徴とは，「クラス分けの持ち点制度の発想」，「スポーツを人間に合わせる（adapted）という発想」，「創るスポーツという考え方」である。クラス分けの持ち点制度は，身体機能レベルの低い人の参加を保障するもので，スポーツが得意な人や不得意な人，あるいは障害のある人となない人が一緒のスポーツを行うような場合に有効であるとしている。藤田（2016）によると，アダプテッドという発想は，例えば，一人一人違う車いすや身体条件によって異なったスタート方法が認められている競泳などでは，各個人の身体条件にスポーツを合わせていくことで誰もがスポーツに参加できるようになることである。創るス

スポーツとは、障害者スポーツでは多様な人々の参加を可能にするためスポーツの修正や創造を行うことである。以上の清野・越川（2019）や藤田（2016）がとらえる障害者スポーツの概念や特性は、障害者スポーツ独自の価値ととらえられ、体育授業における共生の視点や多様なかかわりの在り方に示唆を与えるものと考えられる。

今後、共生の視点や多様なかかわりが重視されることを踏まえると、体育授業において障害者スポーツを素材として教材を扱うことも視野に入れる必要があると考えられる。これまでの体育授業において障害者スポーツを実践する事例が散見される。体育授業において障害者スポーツの教材としての価値は、どのように捉えられているのだろうか。本研究では体育授業における教材の観点から障害者スポーツの価値について検討を行うこととする。

前述の通り、特別支援教育の推進やオリ・パラ教育が提唱される状況を踏まえると、体育授業で障害者スポーツを行う状況を以下の3つの状況に分類することができる。1つめは、特別支援教育に位置付けられる障害のある児童生徒や学習および行動に援助を必要とする児童生徒のみを対象とした体育授業である。主に、特別支援学校や支援学級における体育授業の状況となる。以下、「特別支援学校および学級における授業」と示す。2つめは、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が混在する体育授業や障害のない児童生徒の障害者スポーツを素材とした教材を扱う体育授業である。これらは、多様なかかわりがみられる授業で、以下、「混合授業」と示す。3つめは、オリ・パラ教育関連の体育授業である。オリ・パラ推進の目的や体育理論（中学校）、総合的な学習の時間などの授業である。以下、「オリ・パラ授業」と示す。

これらの体育授業の状況について、障害者スポーツを教材としてどのような授業が行われているのかを分析することで障害者スポーツの教材としての価値を検討できると考える。検討を行うにあたり、まず、これまでの障害者スポーツを教材とした体育授業に関する実践報告をレビューし、分析する（調査1）。次に、中学生を対象に障害者スポーツを教材とした体育授業を行い、授業評価をもとにその効果と教材の価値について検証する（調査2）。調査1と調査2の検討を通して、障害者スポーツの教材としての価値について議論する。

2. 方法

2.1. 調査1：実践報告のレビュー

(1) 対象

対象の文献は、体育授業の実践が掲載される国内の著名な2誌「体育科教育(大修館書店)」と「たのしい体育・スポーツ(民衆社)」に掲載された障がい者スポーツに関する実践報告とした。体育授業の実践から障害者スポーツの価値をどのように捉えているのかを分析するため、解説や提言となる論考を対象から除外した。期間は、体育授業の実践に影響を与える学習指導要領の告示期間をもとに、共生の視点やオリ・パラに関する内容が含まれた中学校学習指導要領の告示以降の期間（2017年から2020年）とそれ以前の中学校学習指導要領の告示以降の期間（2008年から2016年）とした。

(2) 方法

まず、対象の文献を前述の体育授業の3つの状況に分類し、各期間の文献数を算出した。次に、各状況についてどのような授業が行われているのかについて特徴をあらわす文献を例示した。

2.2. 調査2：中学生を対象とした体育授業の実践

(1) 対象・期日

沖縄県の公立中学校（第1学年1クラス生徒30名）を対象に体育理論（ゴールボールを楽しもう）の授業を行った。期日は、2019年11月29日であった。授業者は、大学院教育学研究科に所属する大学院生1名であった。大学院生は、中学校および高等学校保健体育教諭1種の

免許を所有していた。また、教育学部（保健体育専修）の2年次学生3名と4年次学生2名が授業のサポートを行った。

(2) 授業の概要

体育授業は、2単位時間連続して行われた（途中10分休憩）。障害者スポーツのゴールボールを素材とした教材であった。授業の概要及び展開を表1に示す。

(3) 調査内容

生徒が授業をどのようにとらえたかという視点で調査を行った。まず、生徒はゴールボールを教材とした授業を受けた後に授業の振り返りを所定の用紙に記述した。授業者が「ゴールボールをやってわかったことや気づいたことを記入してください」と教示を行った。振り返りにわかったことや気づいたことの視点を入れたことは、生徒の視点からゴールボールの価値を見出すことができると考えたからである。

また、ゴールボールを教材とした授業が生徒にとってどのような体育授業であったのかについて生徒による授業評価を行った。生徒による授業評価には、長谷川ら（1995）の体育授業の形成的評価票と診断基準を用いた。この形成的評価票は、4つの因子で構成され、各因子の観点で授業評価を行うことができる。成果因子は、技能学習や認識学習の成果や成果に伴う感動を意味する。学び方因子は、学習に対する自律的な取り組み方を意味する。協力因子は、肯定的・協力的な人間関係を意味する。意欲・関心因子は、授業に意欲的に参加し楽しさを味わうことができたかどうかを意味する。

表1 ゴールボールを教材とした授業の概要

主な学習活動
1. 障害者スポーツについて考える。 2. 障害者にとってスポーツとは何かを考える。 ・スポーツを楽しむことは同じであることを理解する。 3. めあてを確認する。 ・めあて：ゴールボールを楽しもう。 ・ゴールボールの動画を視聴する。 4. アイマスク体験 ・アイマスクを付け足踏みや歩行を行う。 ・音や声を頼りにすることを理解する。 5. アイマスクでキャッチボール ・音を頼りにすることを確認する。 6. ミニゲーム（1:1～2:2）を行う。 ・ボールの取り方や姿勢を考える。 ・投げる人はアイマスクなしのゲームを行う。 7. ゴールボールのゲームの動画を視聴する。 ・ルールや動き方をイメージする。 ・公式風ゲーム（4:4）を行う。 8. まとめ ・ワークシートに振り返りを記述する。 ・ゴールボールをやってみて気づいたこと等 ・健常者と障害者は一緒に楽しめることを理解する。

(4) データの収集及び分析方法

生徒の授業後の振り返りの記述を意味の通る1文を1区切りとして分類を行った。1名の生徒が2文以上を記述した場合、別々のデータとして扱った。KJ法を参考に下位カテゴリーに分類し、さらにそれらを上位カテゴリーにまとめた。

形成的評価票の各因子の質問項目に対して、はい・どちらでもない・いいえで回答を求めた。生徒の回答に、はい：3点、どちらでもない：2点、いいえ：1点と得点を付した。各因子及び各質問項目で平均点を算出した。因子ごとに算出した平均点を長谷川ら（1995）の診断基準（以下、診断基準とする）と照らし合わせ、体育授業に対して評価を行った。

3. 結果及び考察

3.1. 調査1：文献レビュー

(1) 体育授業における状況

表2は、各期間の文献数を示している。2008年から2016年の文献数は38件で、そのうち特別支援学校および学級における授業の文献は32件（84.2%）、混合授業の文献は1件（2.6%）、オリ・パラ授業の文献は5件（13.2%）であった。また、2017年から2020年の文献数は44件で、そのうち特別支援学校および学級における授業の文献は7件（15.9%）、混合授業の文献は31件（70.5%）、オリ・パラ授業の文献は6件（13.6%）であった。2008年から2016年では、特別支援学校および学級の授業の文献の割合が高く、2017年以降では混合授業の文献の割合が高い結果となった。文部科学省は、2007年「特別支援教育の推進（通知）」において特別支援教育の基本的な考え方を定め、特別支援教育の推進を図った。これにより障害のある児童生徒の体育授業の実施に関心が高まったことが関連すると考えられる。一方で、2016年には「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」、中学校学習指導要領保健体育編に記載された「共生の視点」の重視や、2017年には第2期スポーツ基本計画によりスポーツの価値や社会への貢献が提唱された。これらを背景として共生社会の形成が求められ、2017年以降においては混合授業の文献が高い割合となったと考えられる。

(2) 実践報告の特徴的な事例

各状況における体育授業の特徴をあらわす文献の事例を以下に示す。まず、特別支援学校および学級における授業に関する文献は、大宮（2010）や犬塚（2011）による実践報告などであった。大宮（2010）は特別支援学校の中学部の認識面や社会性に丁寧な援助を必要とした生徒を対象とした、長縄2人ダンスの授業であった。日常的によく踊るフォークダンスを取り入れたことや教師と一緒に踊るなど1年間を通した取り組みについての報告であった。犬塚（2011）は、特別支援学校の中学部の認識面に援助を要する生徒を対象とした、オリジナルのポンポンホッケーの授業であった。生徒同士や生徒が教師と関係性を築き、運動を身近に感じ楽しめるよう工夫を

表2 各期間の文献数

年代	状況			計
	特別支援学校および学級における授業	混合授業	オリ・パラ授業	
2008年から2016年 までの件数（%）	32 (84.2)	1 (2.6)	5 (13.2)	38 (100)
2017年から2020年 までの件数（%）	7 (15.9)	31 (70.5)	6 (13.6)	44 (100)

施した授業であった。大宮（2010）は障害を克服しようとするトレーニングや指導法を重視した授業に対する懸念を述べ、障害のある児童生徒に運動の楽しさや魅力を学ぶことができるように教材を工夫することが大切であると主張した。特別支援学校および学級の体育授業においては、障害者スポーツを手段として身体や障害の機能回復を学習することと、運動を楽しむことを目的とした学習となっていたと考えられる。

次に、混合授業に関する文献は、朝倉ら（2018）や梅澤・矢邊（2018）、村瀬・西脇（2019）による実践報告などであった。朝倉ら（2018）は、小学校1年生の通常学級の児童と支援学級の児童が初めて共に学ぶインクルージョン授業であった。教師の「つなぐ」働きかけにより、当初は統合（インテグレーション）的に世話をする/されるという関係性から相互の「学び合い」への発展がみられたことを報告した。また、梅澤・矢邊（2018）は、電動車いすの選手との交流で、障害のない児童が初めて電動車いすを操作し、サッカーを行った実践であった。このようなかわりわりはリバース・インテグレーション（藤田，2006）と称され、障害のない人が障害のある人の集団に入りかわりを持つ逆統合のことである。梅澤・矢邊（2018）は、リバース・インテグレーション後に障害のある選手にリスペクト意識がより強くなったことを報告した。さらに、村瀬・西脇（2019）によるアダプテーション・ゲームの実践報告もみられた。勝利の不確定性を保持するために対戦相手に応じてルールを変えられるゲームであり（梅澤，2019）、このアダプテーション・ゲームを援用したバスケットボールの授業では、全員が活躍できるゲームを目指し、技能差の特性を活かしたルールの工夫を行っていた。他には、多様なかわりわりの中で児童生徒がどうしたらみんなで楽しめるかといった視点で考えられるようになった報告もみられた。混合授業においては、障害者スポーツを目的や手段としており、適合・適応を含むインクルーシブの視点を学ぶ学習や、それによりアダプテーション・ゲームの援用ならびにルールや用具を工夫する学習となっていたと考えられる。

最後に、オリ・パラ授業に関する文献は、藤木（2018）や長岡（2016）による実践報告などであった。藤木（2018）は、障害のない小学生を対象としたネット型教材としてソフトバレーボールとシッティングバレーボールを実践した。単元の前半6時間でソフトバレーボールを行い、後半4時間でシッティングバレーボールを行った。パラリンピックに対する興味・関心を高めることをねらいとした授業であった。また、長岡（2016）は、中学生の体育理論において、オリンピックとパラリンピックを題材に、理論と実技体験（ブラインドサッカー）で構成した授業であった。オリンピックとパラリンピックを題材とした内容に、生徒の興味・関心を高め、理解を深めた実践となった報告であった。他には、オリ・パラ教育の一環として、スポーツの価値や意義を理解し、国際交流やボランティア育成について地域と連携し取り組む実践報告もみられた。オリ・パラ授業においては、配慮の視点を手段として、障害者スポーツの価値や意義の理解、国際交流につながる学習となっていたと考えられる。

3.2. 調査2：障害者スポーツ教材の有効性の検討

(1) 結果

以下では、調査2として中学生を対象とした障がい者スポーツを教材とした体育授業の検証を行う。まず、生徒による授業評価について、総合的評価の得点は、2.88点であった。これは、診断基準によると、5段階の評定の5であり、大変高い評価となった。各因子および各項目の結果は以下の通りであった。成果因子について、生徒の授業評価の得点は2.86点であった。評定は5であり、大変高い評価であった。この成果因子を構成する各項目の得点と評定は、以下の通りであった。「感動の体験」項目について生徒の授業評価は2.83点で、評定は5であった。「技能の伸び」項目について生徒の授業評価は2.79点で、評定は4であった。「新しい発見」項目について生徒の授業評価は2.97点で、評定は5であった。

意欲・関心因子について、生徒の授業評価の得点は2.93点であった。評定は4であり、高い評価であった。この意欲・関心因子を構成する各項目の得点と評定は、以下の通りとなった。「精一杯の運動」項目について生徒の授業評価は2.86点で、評定は4であった。「楽しさの体験」項目について生徒の授業評価は3点で、評定は5であった。

学び方因子について、生徒の授業評価の得点は2.81点であった。評定は5であり、大変高い評価であった。この学び方因子を構成する各項目の得点と評定は、以下の通りとなった。「自主的学習」について生徒の授業評価は2.90点で、評定は5であった。「めあてを持った学習」項目について 生徒の授業評価は2.72点で、評定は4であった。

協力因子について、生徒の授業評価の得点は2.91点であった。評定は5であり、大変高い評価であった。この協力因子を構成する各項目の得点と評定は、以下の通りとなった。「仲良く学習」項目について生徒の授業評価は2.90点で、評定は4であった。「協力的学習」項目について生徒の授業評価は2.93点で、評定は5であった。

次に、生徒の授業の振り返りの記述を表3に示す。以下、文中【 】は上位カテゴリーを、[]は下位カテゴリーを示す。記述数は全部で139個で、6つの上位カテゴリーを抽出することができた。

もっとも多かったのは、【ゴールボールの魅力】で36個(25.9%)であった。次に多かったのは、【ゴールボール・障害者スポーツへの意欲・関心】で33個(23.7%)であった。以下、【共生】が27個(19.4%)、【つまずき】が27個(19.4%)、【生活に活用】が11個(7.9%)、【その他】が5個(3.7%)であった。

【ゴールボールの魅力】は、[ゴールボールの楽しさ]、[ゴールボールの技能]、[チームワーク]、[ゴールボールの面白さ]の下位カテゴリーで構成された。記述から、生徒はゴールボールの技能やコツ、チームワークの大切さを理解していたことや、これまで経験のないスポーツを行いゴールボールの楽しさや面白さを学習できた様子うかがえる。

【ゴールボール・障害者スポーツへの意欲・関心】は、[次への意欲]、[達成感]、[障害者スポーツへの興味]の下位カテゴリーで構成された。ゴールボールや障害者スポーツをまたやってみたいや思った以上にできた、勝てたなど達成感や次への意欲を持つ活動となった様子うかがえる。

【共生】は、[障害者理解]、[適合・適応]、[共感]、[ユニバーサル]の下位カテゴリーで構成された。【共生】には、障害者の不自由さを理解・共感したことや、ゴールボールにおいて障害のある人でもこのようなゲームやスポーツを行うことができること、障害のない人もアイマスクを着ければ共にできることに関する記述であった。実態の把握だけでなく、工夫・適合のための用具やルールを理解した様子うかがえる。

【つまずき】は、[不自由さ]、[怖さ]、[難しさ]、[痛さ]の下位カテゴリーで構成された。アイマスクを着用して視覚が制限されることの不自由さや怖さに関する記述であった。アイマスクで運動することへの難しさを感じていた様子うかがえる。

【生活に活用】は、[学び]、[気づき]、[有益]の下位カテゴリーで構成された。非日常の経験であったことや今後活かしたいという記述であった。

(2) 考察

授業評価について、成果因子は、生徒の認識学習や技能学習の成果、また、これらの成果に伴う感動を意味する因子である。成果因子の評価と生徒の【ゴールボールの魅力】の記述の多さから、生徒はゴールボールという今まで経験したことがない運動を行ったことで、楽しかったという感動を覚えていたり、新たに気づいたことがあったりしていたと考えられる。しかしながら、「技能の伸び」は評定4となったことと生徒の「つまずき」に関する記述から、生徒はゴールボールを行ったことに不安や怖さを感じていたととらえられ、技能の習熟においては、好意的ではな

表 3 授業後の生徒の記述

上位カテゴリー ・個数 (%)	下位カテゴリー	具体例
ゴールボールの魅力 36 (25.9)	ゴールボールの楽しさ	プレーの楽しさ, 初めての楽しさ, 障害者スポーツの楽しさ, 考える楽しさ
	ゴールボールの技能	コツ・取りやすい動き・音を聞く
	ゴールボールの面白さ	反応, 競い合い, 障害がなくてもできた面白さ
	チームワーク	協力, 一つの思い, バランス
ゴールボール・障害者スポーツへの意欲・関心 33 (23.7)	次への意欲	またやりたい, 体育の授業でもやりたい, チャレンジしたい
	達成感	思った以上にできた, 勝てた
	障害者スポーツへの興味	障害者スポーツが気になる
共生 27 (19.4)	障害者理解	感心, 障害の理解, 共感
	適合・適応	障害者でもできる, 援助
	ユニバーサル	誰でも楽しめる, ルール
	共感	気持ちが分かった, 感覚
つまずき 27 (19.4)	困難さ	不自由さでできなかった初めてで難しい, 障害者スポーツが難しい
	痛さ	怖さ, 慣れない感覚
生活に活用 11 (7.9)	学び	気づき, わかりやすさ, いい経験, 非日常
	有益	今後活かす, 役立てたい
その他 5	2時間連続だった, 大学生とやった	

かったと推察される。

意欲・関心因子は、子どもが授業に意欲的に参加し、楽しさを味わうことができたかどうかを意味する因子である。意欲・関心因子は、「精一杯の運動」と「楽しさの体験」の2項目で構成されている。意欲・関心因子の評定の結果から、ゴールボールを行ったことは楽しい経験となっていたが、全力を尽くした運動とはなっていなかったと考えられる。また、授業後の記述に難しさを主張する感想があり、視覚を遮り行った運動であったため、生徒自身が思ったように体を動かすことができず、精いっぱい運動したという実感を持てなかったと考えられる。

学び方因子は、子どもの学習に対する自律的な取り組み方を意味する因子である。学び方因子は、「自主的学習」と「めあてを持った学習」の2項目で構成されている。学び方因子の評定の結果から、ゲーム中に守備のフォーメーションなどを自分たちで考える場面があり、その点では生徒が進んで取り組むことができたと考えられる。しかしながら、練習機会が少なく、技能の習熟とならず体験する活動にとどまっていたと推察される。

協力因子は、子ども同士の肯定的・協力的な人間関係を意味する因子である。協力因子は、「仲良く学習」と「協力的学習」の2項目で構成されている。協力因子の評定の結果から、生徒はアイマスクを付け周囲を見ることができない状態にあり、その際にボールを渡したり、手を引いたりして助けあったりしていた。これが助け合う学習となっていたと考えられる。しかしながら、ボールを投げることや取ることを教えあう場面はなく、運動を教えあうことはできなかったと考えられる。

生徒の記述のみにみられた内容は、【共生】や【生活に活用】であった。ほかのスポーツを素

材とした教材を扱う体育授業では、「共生」などは意図的な働きかけがなければ学ぶことはできないと考えられる。したがって、【共生】や【生活に活用】がみられたことは今回のゴールボールを行うことにより学ぶことができたにとらえられる。このような価値が障害者スポーツに内在していることが示唆された。

3.3. 総合的考察

調査1と調査2で明らかとなった障害者スポーツを素材とした教材を扱う体育授業は以下のような学習であった。運動の楽しさや魅力の学習は、体育の目標構造（高橋，1991）の情意領域の学習に対応すると考えられる。また、身体や障害の機能回復の学習は技能領域に、障害の有無だけでなく多様なかかわりやインクルーシブの学習は社会的行動領域や認知領域（高橋，1991）に、アダプテーション・ゲームの援用ならびにルールや用具を工夫する学習は認知領域（高橋，1991）に、配慮の視点（清野・越川，2019）を手段とする障害者やスポーツの価値およびその意義の理解となる学習は認知領域（高橋，1991）の学習にそれぞれ対応すると考えられる。さらに、障害者スポーツを行うことは楽しい経験でもあり、作戦を考え生徒自らが進んで取り組める授業である一方で、ゲーム中心となり練習機会が少ないため、技能の習熟とはならなかった。加えて、生徒の記述には、ほかのスポーツを教材化した体育授業ではみられない【共生】や【生活に活用】がみられた。

障害者スポーツを行う生徒自身が障害者スポーツの楽しさや魅力を味わうことができることは、スポーツをすることでスポーツの価値を享受できること（文部科学省，2017）にとらえられる。スポーツの価値として、障害者スポーツを行うことで、多様な特性のある児童生徒がかかわり、どのようにしたらみんなが楽しめるのかを考えることは、スポーツを人に合わせるという発想（藤田，2016）につながることを示唆された。また、オリ・パラやスポーツの価値及び意義を理解できることは、スポーツをするだけでなくみる・ささえるといったかかわりにもつながる（文部科学省，2017）であろう。さらに、国際交流を学ぶことはスポーツを通して世界や未来とかかわることにつながる（文部科学省，2017）と考えられる。そして、障害者スポーツを行った学習で、【共生】や【生活に活用】がみられたことは、障害者スポーツにインクルーシブの要素が内包されていること（清野・越川，2019）を実証できたと言えよう。以上より、障害者スポーツには、ほかのスポーツと同様に人生、社会、世界、未来とかかわる価値や障害者スポーツ独自の【共生】や【生活に活用】といった価値が内在することが示唆された。

4. まとめ

本研究では、調査1と調査2をもとに障害者スポーツの教材価値について議論した。調査1では、体育授業における障害者スポーツの実施について、特別支援学校および学級における授業、混合授業、オリ・パラ授業の3つの状況に分け、各状況の実践報告を検討した。各授業においては、障害者スポーツを目的や手段として、情意領域、認知領域、技能領域、社会的行動領域（高橋，1991）に対応する学習を行っていたことがわかった。

また、調査2では、中学生を対象にゴールボールを教材とした授業を実践し、その効果を検証した。生徒にとってゴールボールを行ったことは楽しい経験となっており、作戦を考えたりして生徒が進んで取り組めた授業であった。一方で、ゲーム中心となり練習機会が少ないため、技能の習熟とはならなかった。さらに、生徒の記述にはスポーツを教材化した一般的な体育授業ではみられない【共生】や【生活に活用】がみられた。体育授業において障害者スポーツを行うことは、共生の視点のもと多様な特性を持つ児童生徒がかかわり、運動の楽しさや魅力を味わう学習となることが示唆された。加えて、障害者スポーツには、ほかのスポーツと同様に人生、社会、世界、未来とかかわる価値や障害者スポーツ独自の【共生】や【生活に活用】といった価値が内在する

ことが示唆された。

謝辞

本研究を進めるにあたり、授業実践およびデータ入力等協力していただいた大学院1年次（当時）國吉澪花さんに深謝します。

文献

- 朝倉了健・露木隆夫・梅澤秋久（2018）インクルーシブ体育の導入—成功に導く教師のはたらきかけの実践例。体育科教育, 66（3）：58-60.
- 藤木裕也（2018）ネット型教材としてのシッティングバレーボールの可能性。体育科教育, 66（1）：40-43.
- 藤田紀昭（2006）リバース・インテグレーション。日本体育学会編, 最新スポーツ科学事典, pp.386-387, 平凡社.
- 藤田紀昭（2016a）文化としてのスポーツ。（公財）日本障がい者スポーツ協会編, 新版障がい者スポーツ指導教本初級・中級, pp.188-191. ぎょうせい.
- 藤田紀昭（2016b）障がい者スポーツの意義と理念。（公財）日本障がい者スポーツ協会編, 新版障がい者スポーツ指導教本初級・中級, pp.10-13. ぎょうせい.
- 長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子（1995）小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み。スポーツ教育学研究, 14（2）：91-101.
- 犬塚亮子（2011）子どもたちはもっと輝くポンポンホッケー—どの子にもシュートする楽しさを—。たのしい体育・スポーツ,（255）：40-41.
- 大宮とも子（2010）長縄二人ダンス—仲間がいるから味わえる楽しさを—。たのしい体育・スポーツ,（241）：38-39.
- 村瀬浩二・西脇公孝（2019）中学校体育でのアダプテーションゲーム—チーム全員が活躍するために。体育科教育, 67（6）：66-69.
- 文部科学省（2007）特別支援教育の推進について（通知）。https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11373293/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07050101.htm,（2020年12月27日参照）.
- 文部科学省（2011）スポーツ基本法。https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm,（2020年12月27日参照）.
- 文部科学省（2012）共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）。https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm,（2020年12月28日参照）.
- 文部科学省（2016a）体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループにおける審議の取りまとめ。https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/072/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377059_1.pdf,（2020年12月28日参照）.
- 文部科学省（2016b）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）。https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf,（2020年12月28日参照）.
- 文部科学省（2017a）中学校学習指導要領解説保健体育編。東山書房.
- 文部科学省（2017b）スポーツ基本計画。https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf,（2020年12月27日参照）.
- 長岡樹（2016）オリンピック・パラリンピックを教育の場に活用するために—中学校における体育理論の実践—。体育科教育, 64（10）：62-65.
- 佐藤紀子（2018）わが国における「アダプテッド・スポーツ」の定義と障がい者をめぐる言葉。日本大学歯学部紀要, 46：1-16.

- 清野宏樹・越川茂樹（2019）「障がい者スポーツ」における概念の整理—定義と事例を手掛かりとして—。北海道体育学研究, 54：43-52.
- 高橋健史（1991）新しい体育の授業研究。大修館書店.
- 梅澤明久（2019）豊かなスポーツライフにつながるアダプテーション・ゲームの提案。体育科教育, 67（1）：36-39.
- 梅澤明久・矢邊洋和（2018）共生スポーツの実践者として育つ 電動車いすサッカーのリバース・インテグレーションの学びから。体育科教育, 66（8）：65-67.
- 渡正（2011）体育科教育におけるアダプテッド・スポーツの理論的構成に関する研究。徳山大学総合研究所紀要,（33）：119-129
- 矢部京之助（2004）アダプテッド・スポーツとは何か。矢部京之助・草野勝彦・中田英雄編, アダプテッド・スポーツの科学—障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論—。市村出版, pp.3-4.